



佐藤圭大選手(写真右・トヨタ自動車所属)と池田樹生選手(デジタル・アドバタイジング・コンソーシアム所属)。共にXiborg Team。写真提供：Xiborg

技術革新と人間の思いが、 限界を拡張させていく

為末 大
(元陸上選手)

インタビュー・文
生島 淳 (スポーツジャーナリスト)

デジタル技術で人間の能力はどこまで高められるのか。パラアスリートと健常者が同じ舞台で戦うことはあり得るのか。「人間拡張」は、スポーツの世界でも議論が活発化している。元陸上選手でパラスポーツの義足の開発にも携わっている為末大に、スポーツジャーナリストの生島淳がインタビューした。

——スポーツの世界を見ると、デジタルデバイスの発達で人間の能力の拡張を促していますよね。たとえば、メジャーリーグで大谷翔平選手が本塁打を量産しているのは、デジタル技術による分析で打球の最適角度が三〇度と判明し、理想のスイングができるようになったからでしょうか。拡張の一方で失っているものもあるんだろうなと想像しているんです。

為末 いま、人間は数値化できないことを頼りに決定することが苦手になってきていると思います。たとえば、暗闇のような微弱な視覚情報しか得られない状況で人間が生き抜くのは厳しくなっていますよね。そのかわり、暗視カメラを持つたりするんですけど(笑)。

——本当にテクノロジー頼みですね。

為末 未来の世界ではすべてが数値化できるようになるのかもしれないですが、データは必ずしも心理を表すわけではない。たとえば、自身の声を録音して聞いてみると、自分が思っていたのと違うなということがありますよね。

——ラジオに出た自分の声を聞くのは、ちょっと嫌なんですよ。

為末 こんな実験があるんです。「こんにちは」という言葉を録音して、二〇人くらい人の声とランダムに並べて聞いてみると、かなりの確率

で自分の声を聞き間違えてしまうそうなんです。

——それは間違えそうです(笑)。

為末 これはとても象徴的なことだと思っていて、自分が感じたことよりも、理屈で考えて、自分で分析したもののほうを頼るようになっていきますね。この流れはデバイスの発達によって強化されていくのは間違いないでしょう。デバイスで測定、自分でフィードバックをかけて修正する。その流れの中で自分の感覚は失われていくわけで、人間の能力の中で失っていく最も大きい部分だと思えます。

外からの刺激で拡張する

——アテネ・オリンピックの体操男子団体総合の金メダリスト、富田洋之さんに話を聞いたのですが、いまの学生は練習を終えて、すぐにタブレットで自分の演技を確かめる傾向が強くなっている。もっと、自分の感覚を磨いてほしいんですが、と話されていたことと共通する気がします。

為末 それは興味深い話です。陸上競技でも同じようなことが起きていて、利点はもちろんありますが、目立った弊害としては世界中の選手の動きが似てくるんです。

——世界で情報が同期されていますから、そうなりますよね。

為末 デバイスの進化がもたらした最も大きな影響は可視化です。すべてのことが映像で処理できる。そうなるとう人間の能力として、どうしてもインプットが優勢になってしまい、反対にアウトプットする力が弱くなり、選手たちの動きが似てこざるを得なくなってしまうんです。

——可視化によって同代的に才能のある選手がまとまって出てくるといった好ましい影響もあると思うんです。たとえば、陸上競技でいえば、男子一〇メートルや、一〇メートルハードルでは日本のレベルが一気に上がりました。

為末 浅くいえば、お互いにライバルを意識してモチベーションが上がっていくという話なんです。今日のテーマに照らし合わせて考えていくと、人間は視覚で捉えたものを、内側に取り込んで模倣したり、影響されることで増幅していくことが、相互に行われているんじゃないかという気がするんです。

——なるほど。能力の高い人間同士が作用しあって限界を突破するわけですね。

為末 最近の研究では、世界陸上の舞台でウサイン・ボルトとタイソン・ゲイが、「引き込み」といって、ゲイの足の軌道がボルトに引っ張ら